ビブリア No. 19

発行 いわき市平上荒川字長尾30 福島工業高等専門学校
編集 図書委員会
昭和50年10月1日

福島高専 図書館報

マンガ・マンガ・マンガ

漫画に関する8つの考察

あのこ あんたの なんなのさ

まえがき

自分が無意識に，あるいは衝動的に行っていることを，ある日，ある時，フト立ち止り，静かに反省してみること。これが，人間の精神の発達にとって，極めて重要な契機（キッカケ）となるのである。少年から青年へ，青年から壮年へと，人生の階段を一歩一歩昇る時，ひとは皆，何らかの形で，この立ち止り＝飛躍を行ってきた。

高専生にとって，5ヶ年の在学期間中に，そのような飛躍は，何回訪れるだろうか？ 毎年少しづつ飛躍＝脱皮を繰返して，生長して行く学生もいれば，ある日突然に，この立ち止りがくる学生もいる。あるいは，幸か不幸か，そのような機会を一度も経験＝自覚せずに，巣立って行く学生がいるかも知れない。とにもかくにも，自分自身の心の姿を，一度は鏡に写して欲しい。おしゃれの為に鏡を見る青年は多くなったが，自分自身の心の軌跡・精神の発達状況を，鏡のなかに見てとる青年は少くなっているようだ。しかし，わが福島高専には，心を写す手鏡をたえず持歩いている青年が満ちあふれていて欲しい，というのが私の願いである。

そこで，学生諸君が自分自身を知る為の第一歩として，"何故，マンガを見るのか" "マンガは，学生にとって何なのか" と問いかけてみたのである。その解答は，ここに収録した8篇のレポートのなかに述べられている。諸君は，そこに自己の姿に見出すことができるだろう。今まで無意識にマンガ本を手にしていた者は，これからは意識的に，また意識的に（つまり自己批判しながら!?）手にしていた者は，次のより内容のある読み物へと進んで行って欲しい。それが編集者の願いであり，この特集のねらいでもある。（挿画はまたまた4土肯野勇浩君の協力をえた。記して謝辞に代える次第である。）

芋川平一

《まんがをなぜ読むか？》

あるアンケートの分析

3M 丹治正孝

"マンガをなぜ読むか？" この一見平凡で，だれも考えつかないような問題について，私としては，公共的な面からと私的な面からと考えてみたいと思います。

まず，身近にある公共的な資料として，私の場合，寮生活をしている都合で，寮生の意見（一年生中心）をとりあげてみました。以下がその結果です。

○問－1『なぜ，まんがを読むか？』

・別に理由もなく，ただ身近にあるから。…6人
・おもしろいから。……7人
・頭をつかわないでたのしめるから。……7人

・リラックスするため。/好きだから。/想像力をやしなう。……各２人
・暇をつぶすため。/興味があるから。/現実逃避……各１人

○問－２「一ヶ月に何冊位読むか？」
・０……なし　・11～15……６人
・１～５……４人　・16～20……２人
・６～10……12人　・20以上……５人

○問－３「まんが本と文庫本とどちらをとるか？」
・マンガ本……20人
・文庫本……５人
・本による……３人
・どちらもとる……１人

○問－４「まんが本は必需品だと思うか？」
・思わない……15人
・思う……９人
・わからない……５人

以上の結果は一年生：20人，２年生以上：９人の合計29人の意見をまとめたものです。

次にこの結果について，考察してみたいと思います。まず問－１「なぜまんがを読むか？」，問いかけとしてあまりにばく然としすぎた点もありますが総じて言えることは，寮生としては，マンガにそれほどはっきりとした目的をもっていないこと，またマンガに対して，学習的態度はみられないこと。つまり，ことマンガに関しては，受動的であることが言える。

次に月に読む冊数ですが，10冊前後が一番多かった。試みにマンガ一冊読むのに，一時間かかるとして，月に10冊，一日の時間にすれば20分たらずの時間でしかない。

問－３　マンガと文庫本の比較ですが，まずことわっておきたいことは，マンガ本と答えた人の大半は一年生。文庫本と答えたのは，５人中４人までは３年生だったことで，この調査が上級生中心にとったならば，この数字はほとんど逆になるであろうと考えられます。また調査前には文庫本と答える人と本による，またはどちらもと言う答えの人とで大半になるだろうと考えていたのですが，このような結果が出たということは，まず一年生は，まだ読書（マンガ以外の）になれていないこと。そしてそのような本を読む暇がないことなどによると思われます。

最後の質問で，マンガの必需性について，この数字は，問－３を考えると矛盾のようです。つまり問－１との関連で，マンガ本のおもしろさについては賛成であるが，その必需性は感じていないということ。

この結果が一般に通用するかどうかは，はなはだ疑問ですが，ただ言えることは，一日20分たらずの時間であるのに，また，マンガに固執しているのでもなく，むしろ日用品のごとく考えているのに，親や先生がいろいろと言いすぎること。これは，弱年層と成年層との間にへだたりをつくってしまう原因の一つともなりうる。また現実にもあることです。

また言えることは（寮に関してですが），一冊の本が何人もの人によって読まれること。すなわち，問－１に反映されたことが起こるのです。

こと寮に関して，マンガ本がはんらん状態にあるのは，公共的には必然的なことであると思われます。

次に私自身なぜまんがを読むかについて。

まず理由の一つとして，前にのべた寮の公共性に起因するもの，そしてマンガの宣伝性，くだけて言えば，「このストーリーの次回がたのしみだ。」と言う気持ち，また他人とウマを合わせるため，とまあこの位の理由があると思います。

マンガが一回限りであると言う点ではテレビよりはずっと良いと思います。また現代的な感覚などと言ったものもマンガによって満たされる場合がある。特に寮生の場合，テレビを見る機会が非常に少ないので，その意味で，マンガのしめる立場は大きいと言えるでしょう。

さて，最近のまんがについてですが，いずれもみさかいなくドギツイのは否めない事実です。ほんの数年前までは考えられなかったことが，公然と掲載されている現実です。これは明らかに，いきずまりを意味すると思われます。しかし，これもまた歴史であり，どうすることもできないと思いますが，最後にマンガに対して思うことは，常に新鮮であること，それだけでよいと思います。

《なぜ漫画は読まれるか》

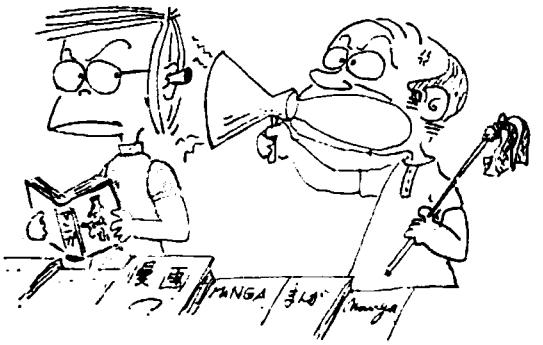
僕は漫画をそう読もうとは思わない

3M　松本匡以

なぜ漫画を読むのか？。僕は漫画に対してそれほど興味はない。でも読んだことがないわけではない。

僕も時々は，立ち読みをするのですが（漫画はしない）その時，漫画の本の回りには人が群がっている。夢中になってかじりついているような人ばかり，なぜあんなにも漫画を見たがるのだろうか？

まず漫画は活字を見て書いてあることを理解するより安易に理解すると言うか，わかることが可能であろう。絵があるから，漫画という字が示すように，漫画は絵が主体です。簡単に内容がわかるから読むのだろうか？。なにもかもが簡単に，苦労なしにわかってしまったのでは，おもしろみがなくなってしまうのではないのだろうか。



おもしろみということがでたけど，おもしろいから読むのだろうか？　僕はそうおもしろいとは思わないけど（あんまり読まない人が言うのは変かもしれないけど），どうなんだろう？　おもしろいんだろうか？　読んでみてすごくおもしろいというなら，あんなにも人が群がるのは，別に変じゃないけど。もしおもしろくないのなら，なぜー？

それなら気ばらしに読むのだろうか？　気ばらしーそういえば，漫画を読んでいるのはいつでも紺と黒の制服（夏は白も加わる）を着た人が多い，勉強の気ばらし？　気ばらしなら他にもあると思うけど，もし漫画だけが気ばらしなんて人がいたらーたぶんいないと思うけど，それにしても漫画本の回りの人の群がり様はいつ見てもすさまじいものがある。

漫画を読むことが，趣味なんて人がいるかもしれない。そんな人が読むなら変じゃないけど，漫画を読むことだけが趣味なんて人の心境は，僕には良くわからない。趣味にするほど興味のあるものかどうかー？

内容にあこがれて読むのかな？　少女漫画は多分にこの要素を含んでいるんじゃないかな。絵，内容が似たものが多い。今の歌謡曲みたいだ。でも分別のある（と思われる）紺，黒，白の制服の人が内容にあこがれるのだろうか？　心を打つ名作なんて呼ばれるようなものがあるなら，不思議じゃないけど，テレビ，ラジオ（中波）のスイッチを入れるとすぐ聞こえてくるような安っぽい歌と同じような内容だとしたら，あこがれなんてー？。

いろいろ考えてみたけど，今まであげたうちの1つだけの理由で読むことは少ないと思う。いろいろな条件（前記のものだけではないかもしれない）があって読むのだと思う。もちろん1つの理由だけで読むこともあるだろうけど。

前記のうちで，漫画を読む人全般にあてはまることは，漫画は苦労なしに読めるということじゃないだろうか。現代は，この種のもの（苦労なしにわかるもの）がいたる所にあふれている。苦労なしにわかるということは，人間だれでも望むことだろうけど，まるでなにもかも苦労なしに，努力なしにわかってしまうとしたらこんな危険なことはないのではないだろうか。努力する，苦労することがなくなってしまえば，苦労の後の喜び，感動といったものがぜんぜんなくなってしまい，人間はすべて何も感じない，何もしようとしない無気力な人間になってしまうのではないだろうか。ーこんな危険なことはないであろう。

人間の目的は快楽を求めることだと，ある本で読んだことがあるけど，現代においては快楽の意味をまちがって受けとめているのではないのだろうか。苦労なし，努力なしにできることは，快楽とは言えないと思う。苦労，努力のないものを快楽と考え，ひたすらそれを求めたならば結果は無気力，なんでこれが快楽であろう。

漫画が苦労がないからといって読まれるとして，そればかりに執着したら，その人は無気力な人間になってしまうだろう。ーそんな意味で僕は漫画をそう読もうとは思わない。でも一息入れるのに読むのなら，害どころか，かえって気分転換として良い結果を生むのではないかと思う。

《漫画はなぜ読まれるのか》

精神の自由を求めて

3E　菅　山　　茂

漫画はなぜ読まれるのか。その前に少し漫画の歴史についてのべてみよう。

文久二年，幕末の日本にやってきたイギリスの漫画家C・ワーグマンが，日本で最初の漫画雑誌「ジャパン・パンチ」を創った。そして日本の漫画界は，明治中期漫画家北沢楽天のデビューによって急激に発達し，それまで「おどけ絵」とか「ポンチ絵」といわれていたのを「漫画」と呼ばせ，彼はその普及に努力した。大正時代に入ると，岡本一平のおとな漫画が大流行し，昭和初期から暗い世相を背景に，新聞漫画ではギャング路線がしかれた。明治から大正にかけて，日本の漫画界は，新聞でも雑誌でも大人漫画が中心で，子供向けのものはなかなか創られなかった。けれども関東大震災の前年，宮尾しげをが登場，はじめて少年を対象にした「漫画太郎」を描いた。このようにして少年漫画の世界がクローズアップされた。少女漫画も現れ，連載漫画の単行本化など，少年漫画は活況を呈するようになった。

大不況で幕をあけた昭和初期，日本はだんだん強まる軍部の独裁で，世相は暗くきびしい毎日が庶民の暮らしにのしかかっていた。そんな社会の雰囲気の中に，笑いを見いだそうと漫画家たちは，当時としては奇想天外なキャラクターを創った。「貧しい子供たちに希望と勇気を与えよう」と，田河水泡は「のらくろ」を描いたところ，爆発的な人気者になってしまった。ー

方、当時の日本は豊富な資源を求めて、海外雄飛がさかんだった。国民はみな外国に、満たされない夢をはせていた。そんなあこがれの代表として登場したのが、島田啓三の「冒険ダン吉」だった。南海の孤島で、ひとりぼっちになりながらも、大和魂を発揮してさまざまな困難とたたかい大活躍するダン吉の行動は、当時の子供たちの夢をはぐくみ、空想の世界を豊かにふくらませてくれた。

太平洋戦争に敗れて、まず少年たちの目の前に登場したのが「赤本」と呼ばれた漫画本であった。当時読みもののなかった少年たちは先をあらそって、それにとびついた。その後、昭和23年、少年の心を明るくするという目的のもとに、「漫画少年」が創刊された。この月刊誌は、戦後少年漫画発展の第一歩ともいうべきもので、数多くの漫画家を育てる役割をはたした。

昭和26年ごろから、ストーリー漫画が評判を集める一方、ギャング漫画にも毛色の変わったキャラクターが登場し、ロボットやカッパなどが堂々と主人公になりアイドルとして人気者になっていき、漫画単行本時代に突入する。同時に新聞でも続々と新しい時代のギャグキャラクターが生みだされた。

講和条約が成立し、どうやら日本も独立国となったころから、テレビも本放送が開始された。社会も安定したころ、少年雑誌の内容は豊かになった。このころのギャグ漫画は、豊かな時代を背景にして、楽しい家庭生活や学校生活ものが新聞や雑誌の誌面をにぎわしていた。そしてテレビの普及が急速に進むにつれ、それまで漫画専門だった少年たちの娯楽が多様化されはじめた。30年代も後半に入ると、ギャグでありながら、スピーディーなストーリー展開がはかられ、いままでにない強烈なキャラクターが続々登場した。これらに、少年はもとより幼児から大人まで読者は熱狂した。大学生が少年週刊誌を読むのが話題になったのもこのころであった。

我国の経済が飛躍しはじめたころから、漫画の人気キャラクターを使用した商品がつぎつぎに現れるようになった。これらがテレビのコマーシャルなどにも流されはじめて、全国のテレビッ子をひきつけた。

レジャーブームの進む中で、それまでタブーとされていたハレンチ漫画が大ヒットした。そして現在の漫画家は個性を生かし自分の好みのキャラクターを創り出している。

以上、日本の漫画の歴史をのべた。それにしてもなんと漫画が大衆に読まれるようになったことか。

さて、私たちはなぜ漫画を読むのだろうか。私も漫画の愛読者の一人であるが、なぜ漫画を読むのかを考えて読んだことなど一度もない。そこで一冊の週刊誌を取り出して「なぜ読むのか」を考えながら読み始めた。しかし、それはむだであった。そんな事を考えながら漫画を読める訳がなかった。けっきょく倫哲のレポートを書こうとして、一冊の漫画本を読み通したにすぎなかった。

そこで私は漫画を読む理由として一つだけあげてみることにした。その理由とは「おもしろいから」である。これで終わってもいいのだが、そうもゆかない。どんな時「おもしろい」と感じるのであろう。

それは「自由になったとき」と、定義する。ここで言う自由とは、「義務も束縛もない、自分の意思がどのような姿で存在しても良い世界なのである」と、また定義してしまおう。

定義には説明は不必要なのであるが、その定義について、強いて説明し例まであげよう。

まず義務とか束縛であるが、これはどんな時でも、どんな人間にでも、ついてまわるものである。そしてそれを強いるのは人間であったり環境であったりする。そんな時、ある人物を知る。その人物こそ漫画の主人公、または登場人物なのである。その人物は自分には無いような、また周囲の人間にも無いようなものを持っているものである。そしてそれは自分のもつ性格や自由とは、ほとんど異なっている。

そのような時、自分（私）はその漫画のもつ自由な世界に、自分の意思を、姿を変えて入れこもうとする。入れこもうと言うより、これは入ってしまうと言ったほうが良いかもしれない。その意思は主人公、または自分の一番良いと思える人物、またはただその人物を、その人自身は意思も性格も示さないで、第三者的に見れる人物として、そのような人物がいない時は自分で勝手に意見のみをもつある人物を想定して、それらの人物になりきろうとして、姿を変えて存在するのである。このように漫画のもつ自由の世界に、自分だけが持つ自由な意思や考えが入りこんで、それら二つの世界が共鳴した時、私には、「その漫画はおもしろい」と、言えるのである。つまり、漫画の世界においてのみ自分は自由だと感じられた時、その時と同時におもしろいとも感じることができるのである。

終戦後、当時の子供たちにはあらゆる不自由さがついてまわった。そして、そのような時、子供たちの笑いも少なかったにちがいない。それに、そのとしごろで求め始める知識や夢、または希望なども自分の手のとどくところにはないようにも思われたか、それ自体の存在についても気づいていなかったのではなかったろうか。そんな時、夢と希望を持つ人物が、主人公やそれをとりまく人々として登場する漫画を手にしたら、何も感じないだろうか。そんなことはないと思う。少なくとも、心のどこかしらには、明るさと、その明るさの喜びが、見い出せたにちがいない。

漫画は、文字の読める人たちだけのものにとどまらず、多くの人々にとり入れられていったと考えても良いと思う。

さて、大学生も漫画本の愛読者という。大学生でも

大人でもいろんな束縛の中に育ち，すでに進路もなかば決められているものである。そのような人々が，漫画を好きになることを不思議であると思うこともないと思う。

私はなぜ漫画を読むか，それは以上のべたようなことであるが，一般の場合も，過去の場合も，同じ理由としてのべた。それにしても，結論を出すことのむずかしさ，ましてソクラテスを勉強した後に事物の現象の理由をのべることのむずかしさ，または気のひけることといったらなかった。

《まんがをなぜ読むか》

序論・本論・結論

3E 佐藤陽一

1. 序論的なこと

「まんがをなぜ読むの」と聞かれたら，ぼくなら一瞬とまどって，おそらくむずかしく考えて苦しまぎれに，「じゃああんたはなぜ読むの」と言い返したくなるだろう。むずかしく考えるとそれほどむずかしいのである。しかし，簡単に考えるとこれほど簡単な質問はないと思われる。ただ「読みたいときに読みたいまんがを読むだけさ」と。簡単に考えたのでは倫哲のレポートにならないので，むずかしく考えることにする。「まんがを読む」という動作は人間にとって，立ったりすわったりねころんだりして，手でめくりながら目を使って見るというごく単純なことであるが，これがたいへん重要なことなのである。人間が生きていくうえでこれほど単純で手軽に楽しめて筋がとおった，お子様からおじいちゃんおばあちゃんまで世間一般の人が読めるものはないと思われる。文字なんかは少しぐらいとばしても，絵だけで話がわかるのが大部分である。そんなカジュアル性というかリラックスして読めるという手軽さも加わって，まんがの人気というのはたいへんなものなのである。

2. 本論的なこと

1ではおもにざっと自分で考えているまんがの存在的なことを書いたけれども，ここではその本質をきわめようと思う。まんがというものはふつう，あの安っぽい紙に印刷された絵の多く書かれた本で一回見ると興味のなくなるものである。しかしその大したことのない本の中にはいろいろなことが隠されているのである。数年前，中学校か小学校で歴史を習っているときに平安末期のころだと思うが，そのころの人が書いた今でいうまんがのはじまりみたいな，「鳥獣戯画」という絵を見たのをおぼえている。それは，かえるやうさぎが，おどったり笑ったりしている絵の上の方に何か文字が書いてあったようである。その絵を見たときは，とてもおもしろい絵だなあなんて思ったけれども，今思うと，今のまんがの元祖みたいな気がするのである。今のおかしなへてなしなまんがを見ているせいか，とてもすばらしく見えるのである。躍動するリズムにのっておどっているようなかえるに見え，感動したのである。今のまんがにもすごく感動的な絵と内容をもったものがたくさんあるけれども，すごくおかしなただスケベなものや変態的なもの，ドッチラケなものも多くあるようである。どちらにしろ，人によりこんなのが好きだ，きらいだとあると思うが今の人たちはまんが好きでよく読むのである。まんがは読むというより見るという感じで親しまれているのである。

このように人気があるということは，いろんな魅力があるということである。魅力というものはどんなときにも感じられるわけではないのである。人間またはおもに学生が本気になって勉強しているとき，まんがを目の前に出されてもあまり喜こばれないのがふつうである。それは一種のじゃまものと化し，マイナスの魅力を持ったものとなるのである。もし勉強をいっしょうけんめいやって疲れて休んでいるなと見えたときに出してやるとそれはもう，すごい魅力のかたまりとなり，その人に休息を快適なものとし次の勉強への意欲をかきたてるのである。これはまんがを読む目的らしきものがあり，とてもよい場合に思われますが，これではそのまんがのつづきが気になって勉強も手につかなくなるということもあるのであまりよくないのである。まんがはひまな人とか，映画を見るお金のない人とか，恋人のいない人，読書傾向がまんがである人，頭がまんがのような人，最後のはちょっと関係ないかもしれないがそんな人が好んで読むようである。

今までのは人がある場合において読む場合であったが，今度はまんがの内容についてちょっとふれることにする。先にも書いたように，人によってこういうのが好きだきらいだというのが必ずあるようだ。体が大きくすごみのある人がかわいいまんがのファンだったり，小さなかわいい女の子がとても残酷な内容のものが好きだったりする。その人の好きなまんがによって，性格がわかるかもしれない。それほどまんがは人間に密着した存在にあるのである。密着しているということは，相当読まれているということである。どんな人がどんなまんがをよく読むかというと，小さな方からいくと幼児期にはまだ何もわからないので，どんなまんがでも，絵が書いてあればそれでよいのである。少年期にはちょっとわかってきた程度で，単純なテレビでやっているような夢の夢のような空想にとんだ，大人にとってはばかばかしい，そんなまんがを夢中でよむ。少年期は小学一年から四年ごろまでで，小学校も五，六年，中学校ぐらいになると，男ものと女ものに大きくわかれ，ふつうの，少年なんとかというものを読むようになる。このへんになると相当話の内容も，

細かく長くなる。休み時間に読み切れなくて授業中に、先生そっちのけにして読むなんていうのも出てくる。これがまたスリルもあって楽しいのである。とてもいいところを読んでいたら、こぶしが飛んできたなんてよくあることである。女の子もさるもので、男と女の恋愛的なものが専門に書かれている。少女なんとかというのが好んで読まれる。学校なんかでもよくまわし読みなんかをしているようである。また何人もより集まって一冊のまんがにかじりついているのも見うけられる。このように小学校から中学校にかけての少年少女は、まんがによって、心の中に何か考えというか思想の形のようなものができ、それはのちのちまでも影響があるように思われる。だから漫画家は重要な責任があるのである。次に中学上級から高校生ぐらいになると好みはふつうの大人とほとんど変わりがなくなる。少年なんとかというのをはじめとして女の子はセブンティーンとかぐっと色っぽい本をキャーキャー言いながら読むようになる。だから女子高生なんていうのはスケベなのである。男がそれにも増してスケベなのは俗にいうエロ本というまんがの本を読むせいかもしれない。大人になるともっぱらこんな本ばかりのようである。内容はともあれ、まんがなどでは童心を失いたくないものである。あの絵と少ないことば書きによって迫力にせまった感動的な絵と筋のまんがは、どんな人をもひきつける。まんがを読むことによってわれわれは、何事をも忘れることができるのである。だから、精神の洗浄剤として、クリーナーとして、また安らぎの娯楽として、暇つぶしとして、気分転換として、読書として、趣味として、読むのである。あのまんがを見ていると筆者の苦労、苦心が見えまた感動するのである。

3. 結論的なこと

やっと結論にこれたわけであるが、こう考えてみると、まんがというものは実に偉大なものであることがわかった。今やまんがはなくてはならない尊い存在になって、人々の心の中にいろいろなことを与えてくれる。だからまんがは読まれているのである。連載ものなどを読む場合にみんなであのつづきはどうなったとか、聞いたり教え合ったりする。ここにも楽しさがあり魅力があるのである。このようにまんがというのは人々をひきつける魅力のかたまりのようなものなのである。だから不可抗力的にも読むことがある。どちらにしろわれわれはまんがに大きな期待を持ち、そこには必ず楽しいおもしろい感動があるのを知っているから、勉強のあい間に、休み時間に、昼休みに、クラブのあとに、何もしたくないときに、ひまなときに、なんとなく読むのである。

《何故漫画を読むのか》

ぼくの精神発達史

3C 金 子 光 良

1. はじめに

僕は今、〝何故、漫画を読むのか〟という問題を前にとても戸惑っている。どこからどうかじりついたらいいのか見当のつかない問題である。しかも、それを倫哲のレポートとして提出するということに、大きな不安を感じている。このまま書きなぐってしまえば、およそレポートなどという種類の文章にはならないはずである。とに角、仕方がないので自分なりにこの大問題にあたってみることにした。

2. 漫画との出会い

僕にとって、漫画との本当の出会いは、確か小学校1年生の頃だったと思う。その頃は、〝鉄腕アトム〟と〝鉄人28号〟が当時の僕のような小学生の間で大変な話題をまき、両者ともテレビ化され、その人気の勢いに拍車をかけた感があった。僕はそのどちらにも大変魅せられていたが、強いて言えば〝鉄人28号〟の大ファンで、そのマンガ本はたいてい集めた。カッパコミックスのシリーズものであったその本は、あの頃の僕の最高の宝物であったと同時に、最高の友でもあった。〝何故に私は、鉄人28号を読んだのか？〟その理由を、その頃の幼少の僕に戻って思い起こしてみると、

1，自分の夢が主人公の正太郎君に託されていた。
2，この次には、どんなロボットが登場してくるのか楽しみだった。
3，ストーリーがおもしろかった。
4，鉄人28号の強さにあこがれていた。

まあ、この程度の理由があげられるが、なんとまあ単

純でくだらないものだろうと思う。しかし，漫画そのものが大人にとって，単純でくだらないものである限り，それを読む理由が単純でくだらないのは，仕方のないことではないだろうか？

3．いつ漫画を読むのか

次に漫画をいつどんな時に読むのかということについて考えてみることにしよう。整理して列べてみると，

1，土曜日の午後，街で立読み。

2，テストが終ってからベッドで読みふける。

3，何もしたくない，何もする気のないとき，寝ころびながら読む。

大きく分けると，この3つになるのではないかと思う。共通して言えることは，暇つぶしとして読む，つまり自分の空白の時間を，漫画を読むという行為で消費していくことである。あとは，ストレス解消，これは2のテストの後に読むというのが代表している。僕なども，おもしろくないとき（僕は，いつもおもしろくないのですが）漫画で笑ってみたくもなるのです。こう言ってしまうと，ぼくなどは，いつも漫画を読んで笑っていないと，真に健康にはなれないみたいですが，そうしてもいられないでしょう。

4．自分の場合の読む漫画の推移

ここで僕の場合の，幼少から現在に至るまで読んできた漫画の傾向からみる自分の精神的な分析を，してみようと思う。

○小学校1～3年

○SFもの，先ほど話した鉄腕アトムとか鉄人28号など。夢のあるものを求めていた。強い正義へのあこがれ，神秘への好奇心。

○小学校4～6年

スポーツ，根性もの。自分が男であることの自覚，不屈の根性を持ちたかった，ソフトボールに熱中していたので。

○中学校1～3年

手塚治虫，石森章太郎等，小学校1～3年に比べるとやや高等？なSFもの。小説ぐらい読みごたえがあるものを求めていた。宇宙とか死とか時間とかそんなことばかり考えていた。

○現在

ギャクもの，ナンセンスギャグ，理屈抜きにおかしいもの，絶望感，劣等感，憂うつ，空虚感，人間不信，自己否定から一瞬でものがれることのできるナンセンス，ギャグへの逃避。

○一種の逃避機制から，現在はギャグものを読んでいるのだが，この逃避機制はとてもよくないものらしいのだ。とすると，僕は漫画を媒介として，適応を妨げる邪心と結びついている非常によくない状態にあるようなのだ。以後は，もっと違ったジャンルのものを読むように心がけ，逃避という言葉も心からぬぐいとらなくてはならないようである。

5．雑感

漫画はそれぞれの人によってニュアンスの違った立場にあるものであるということは否めないだろう。それは，沢山ある漫画の種類で，どんな種類の漫画を読むか，その選択の目が人によって違うということからも言えるだろうし，4で述べたように，自分もまた時によって選択が変わってくるのだ。各人各人によって，また過去の自分，現在の自分によって常に漫画は，違った位置にあるようだ。漫画には，低級なものから，ひょっとしてヘタな小説なんかよりずっとすばらしいものまでさまざまの種類がある。（もちろん小説もピンからキリまでいろいろだが）しかし，それらすべてをバカらしいとか，単純だとか，くだらないという言葉で否定すべきではないと思われるのだ。一部の人達を除いては，何らかの存在価値はあるのだから。漫画は，人間の何かを支え，何かを助け，また何かを満足させ，何かを変え得るものではないだろうかと思うのだ。例えばノンフィクションものなどは，とても大きな感動を覚えますし，画と言葉とアクションの共存した一種のコミュニケーションとして，確かに沢山の人間に読まれているのだから，先ほどの人間の何かを変え，何かを支え，何かを助けうんぬんといった言葉もまんざら大げさでもないのではないだろうか。もっともその何かは，5の文頭で述べた通り，人によって違ったもので，ここではっきり言えるものではない。余談だが，ぼくの好きな手塚治虫氏の〝鉄腕アトム〟やシリーズ〝火の鳥〟などは理学博士とか，小説家の中にまで読まれていて，大変な評判を得ているのだ。僕は，漫画も良いものを読んでもらいたいと思うのだ。丁度，小説かなんかと同じように，

《マンガについて》

現代人のホンネ

3C　五十嵐　喜　雄

1．はじめに

最近書店の店頭では週刊誌，マンガの立読みが目立つ。そしてその大半が中，高校生，高専生など若年層であるが，いったい彼らを引きつけるものは何か？を考えてゆきたいと思う。

2．マンガ―　一般的知識として

マンガはナンセンスマンガ（ギャグマンガ）と劇画とに分けられる。本来マンガとはナンセンスマンガを指していたようだが，昭和30年前半ごろから劇画と呼ばれるストーリー性をもったものが出現したようである。その後昭和30年代後半には，対象を主に十代の少女とした「少女マンガ」の出現をみる。時代は流れ，

西欧の開放的な性意識と共に永井豪を代表とする「ハレンチ・マンガ」がおとなの社会に不満をもつ若い人たちの間で絶対的な人気を呼んだ。

3．マンガーブームの中での

以上述べてきたようにマンガはブームを形成してきたわけであるが，昭和50年5月12日付読売新聞朝刊の文化欄に「本と人」という特集が組んであり，「戦後マンガ史ノート」なるものを出版した人がいる云々という記事が出ていたが，その中で解説者は『このブームの中でマンガは表現としてのアクチュアリティーを持つ「ホンネの文脈」から「風俗的な流行としての娯楽商品」へと質的に変化していった……』と述べているように，マンガはしだいに風俗的なものへ変化してきたことは疑う余地がない。

4．マンガーそのブームの根底にあるもの

よく，おとなは「またマンガばかり読んで！」と言って子供に注意するが，それにもましてマンガがブームとなっている理由は何だろうか。特に「笑い」を排した劇画の人気には首をかしげてしまうのだが……。

まず第1には「やり場のない不安や焦燥にかられる」現代の若者の「ホンネ」がそこに描き出されているからではないだろうか。これが最も切実な理由と言えるだろう。事実マンガの中にはある種のやさしさが見られる。

特によい例と思うのは数年前大ヒットした「同棲時代」である。若い男女の同棲生活を通して世の中の機微をいろいろに展開させ，当時社会に充満しつつあった「三無主義」の中にある倦怠感，虚脱感を見事に描き出している。その上若者の共感を呼び，単なるアウトローとしては片づけられない問題を社会に投げかけた。

次に我々戦後派のスピード感覚ーコマの移り変りにより，そのストーリー展開を楽しむという小気味よさであると思う。

第3の理由としては，そこに描かれているロマンへの憧憬，それに主人公への同情にある。この心理は，「お涙ちょうだい」の昼メロに似ているが，それが現実的なのに対しマンガの場合は「美意識」の中での涙であるから多少異なると思う。この傾向は特に少女マンガに言える。大ヒットした「ベルサイユのバラ」などはこの好例と言ってよい。

第4には現代的感覚におくれる，他人とのコミュニケーションの材料として読むというのが掲げられる。もっとも，これは心理的な理由というよりは状況によるものである。

第5には出版界の繁栄のため雑誌が容易に入手できるところにある。

「マンガ」を読む理由は以上のようなものである。

5．む す び

以上述べたとおり，今日マンガは世相としてだけでは済まされないほど人々の心に食い入っている。これは，マンガが我々の「ホンネ」であり「甘え」を鋭くとらえているためであると思う。今後も商業主義の繁栄と共にブームは衰えそうもないが，そのために現代人の思考が鈍るようなら問題があると思う。

《なぜ漫画を見るのか？》

人間のやさしさを求めて

3土　鈴 木 孝 二

漫画は今，詩のもってきた役割に代わるものだということを聞いたことがある。確かにそうかもしれない。少女漫画のロマンは，おセンチな女学生の心を踊らせる。少年の漫画は，いきいきした夢や希望を与える。成人漫画の一部は散文詩のような淡々としたタッチで，人間を歌っているように思う。

ところで，詩とは文字を使って書くが，文字で書きつくせないものもやはりある。その点，漫画は，絵というものをもつ。効果的図柄やコマの大きさを変える等によって，いくようにも表現できる。もちろん言語を効果的に利用できる。必要ならば，詩を使うこともできる。つまり，詩，文学とも美術とも違った感覚で表現できる，新しいものとも言える。

のらくろ漫画を見たことがあるだろうか，のらくろ漫画は今の漫画と違って動きはない。彼（のらくろ）の動作はヌーボーで，しかものろい。しかし楽しいし，暖か味がある。その因はせりふのうまさであり，画の確かさであろう。しかし，それだけではない。彼には人間の血が流れているように思える。人間の喜怒哀楽が，のら犬という素材を通して伝わってくるのだ。それがのらくろ漫画の人気をたもっている理由だろうと思える。

のらくろ以外の漫画にもそれがいえると思う。売れる漫画は人間的である。人間の喜怒哀楽を感じる。それは漫画が生身の人間を書いているからといえる。人間の生き様はそれほど劇的ではない。普通，平凡な日々を送っている。映画のようなすてきなバックや音楽は，普通の生活にはない。しかし，ちょっとした心づかいや，やさしさが，すてきなバックや音楽より，もっと，もっと大事なものだと思うのだ。どんなにすばらしい完成されたストーリーでも，やさしさを持たないものには，興ざめしてしまうと思う。漫画の中にさえ，人間は，ちょっとした心づかいや，やさしさを求めているのではないか。

美術とは超時代的なものといえる。千年前のものにも新たな感慨を受ける。それなら漫画はどうだろう。

残念ながら，けっしてそうとは言えない。時代に押し流されやすい。それは漫画が人間的であるからだ。もともと，時代風刺のためや，うっぷんばらしに書かれたものだからと言える。

鳥獣戯画しかり，春本の絵しかり，しかしその中にその時代の庶民を見いだすことはたやすい。漫画は絵をつかった時代の庶民の記録であると言える。美術は近よりがたい。しかし，漫画は近よりやすく，意図がはっきりわかる。伝達手段として，最適であると思う。

漫画反対論者は賛成しないだろうが，漫画は決して，悪でなく。いわゆる，人生の潤滑油と言えるだろう。

《漫画論》

「読む」ことと「見る」ことの違い

3土　柳原祐治

今やマンガは，現代社会において不動の地位を占めた。小学生，中学生から大学生，ＯＬに至るまでマンガを眺めている。当然高専生もこれらの部類に属す。大人のひとたちは眺めないのか？という疑問も生じてくる。世間一般に大人と称される人々は，女性のヌード写真のついたマンガを眺めるのである。参考までに週刊漫画，ビッグコミック，マンガパンチｅｔｃ，プレイボーイとか平凡パンチなどもマンガに入れてもかまわないだろうと思う。

私はよく友人に尋ねる。「なぜおまえマンガ見るんだい。」すると答えは「見たいから見る」とか「暇だから」というようなものである。どうやらマンガを見るのには理由などさほどたいしたものがないようである。

なぜ人はたいした理由などないのにマンガを見るのだろうか。無理に理由をこじつけてみたいと思う。

一つは，決して頭をつかうことなく見れるからである。人間などという動物は，たえず楽をしようと願っているもので，現代文明もここに一つ起因しているともいえる。しかし文明を築き上げた後の楽とマンガの楽とでは相違をみる。それは楽を求め得るまで努力したこととなんの努力もなく楽ができることの違いなのである。テレビもマンガに共通な点を見い出すことができる。のちに述べることもマンガとテレビは関連してくるようである。

第二に，娯楽として楽しむためである。マンガを見ることによってストレスを解消できるらしい。勉強などのあい間にマンガ本を手にしているのを見かけるからである。笑顔などを見せているところから，けっこう楽しんでいることを判断できる。あくまで私の経験からだが，マンガ本を見れば頭の疲れがとれるというものでもない。学生にとってはただ目が疲れ，勉強時間の削減にすぎない。

第三に，なんといってもおもしろいからだろう。時間に追われ，この荒廃しきった世の中で笑いを求めないということはないであろう。この理由などは，漫才漫談，落語などがすたれないで残っているという点に共通しているかもしれない。しかし今のマンガは決して笑いだけのものでなく，劇画，悲劇，何々物語など取り扱う範囲も広くなってきてはいる。

四つめ。夢を見ることができるからである。マンガのヒーローやヒロインになったような気持ちになってマンガの世界に没入してゆく。このようなことが実際にあったならなあ，などと考えてしまう。これらは同一化機制などという呼び名で呼ばれているはずである。テレビのメロドラマ，フィクションの番組が好んで見られるのはこの辺の理由であろうか。

もっとものようなことを並べてきたが，早くいってしまえば時間つぶし，暇つぶし，何も考えたくない，ただボケーッという状態のときマンガを見るのである。

もし私が「おまえはマンガを読んでいるか。」と聞かれたら，「読んでいない。」と答える。実際，たまにしか目を通さない。それほどマンガなど見てはいないのである。私は文中で決して「マンガを読む」とはいわなかった。「眺める」「見る」「目を通す」などで置き換えてきた。これにはそれなりの理由がある。マンガなど見て自分の知識，脳を発達させるものではないからである。逆に衰えさせてしまう。読むとは，自分のものになってマイナスの面でなくプラスの面でそうなったとき初めて使えることばなのである。専門書，小説論説などはいつも読むといえるか，といえばそれもうそになる。あくまで自分のものになれば「読んだ」，ならなければ「目を通した」なのである。これだけは誤解のないように願いたい。

マンガのみならず共通点をもつテレビについても言及してきたが，無意識のうちに上に述べてきたようなことが隠されているのにちがいない。これらは自分自身の意見であって必ずしも正しいといえるものではない。

マンガはこれからももっと広い世代に見られるであろう。この文明社会の中でマンガの娯楽としての役割は相当大きいからである。

お知らせ

このたび図書館閲覧室の湿式リコピーを，乾式の新しいリコピーに取替えました。より鮮明なコピーが作れる筈です。大いに活用して下さい。

なお，それにともなって湿式用の感光紙を使い残している者は，乾式用の感光紙と交換しますから遠慮なく申出て下さい。

新着図書目録

※印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載した。

総記

朝日新聞縮刷版　1975年3－5月朝日新聞社※
出版年鑑　1975年版　出版ニュース社※
百科年鑑　1975年版　平凡社　※
万有百科大事典12　経済　産業　小学館　※
世界の名著
続7　ベルダー　ゲーテ　中央公論社※
50　ウエーバー　同　※
東洋文庫270　朝鮮小説史　平凡社　※
271　バタヴィア城日誌(3)　同　※
272　中国革命の階級対立(1)　同　※
※
日本教養全集3.8.
東天紅　明治文献
東京大学公開講座14　人間と環境　東京大学出版会
奈良国立博物館
阿弥陀仏彫像　東京美術
国宝　地獄　餓鬼草紙　岩崎美術社
京都大学文学部国史研究室
改訂増補　日本史辞典　東京創元社
梅原猛他
考える愉しさ　新潮社　※
講文大系13　富山房
塙保己一
続群書類従　続群書類従完成会※
1下～4上　5上～10下　11下～12下　※
14上下　15下～17上　18上～22下　23下　※
24下　25下　26上～27上　28下～30上　※
31下～32下　33下　34下　補1～2　※

哲学

近代日本思想大系
24　柳宗悦集　筑摩書房※
27　三木清集　同　※
21　大川周明集　同　※
日本思想大系
2　聖徳太子集　岩波書店
E.トンマラ他
ゲルマンケルトの神話　みすず書店
マッソンウルセル他
インドの神話　同
ウィトゲンシュタイン
ウィトゲンシュタイン全集　大修館書店
東　洋　心理学の基礎知識　有斐閣　※
同　心理用語の基礎知識　同
村治能就
哲学用語辞典　東京堂出版
吉田正昭
人間の科学としての現代心理学　日本放送出版協会※
沢田允茂
知識の構造　同　※
同　哲学　上下　同　※
林達夫他
思想のドラマトゥルギー　平凡社
堀一郎　聖と俗の葛藤　同
田村円澄
日本思想史の基礎知識　有斐閣
ポッパー　自由社会の哲学とその論敵　世界思想社
牧野力　ラッセル思想と現代　研究社

歴史

神山四郎
ＮＨＫ市民大学叢書1　歴史の探求　日本放送出版協会※
門脇禎二編
日本生活文化史9　市民的生活の展開　河出書房※
朝日新聞に見る日本の歩み
屈折のデモクラシー1～3　朝日新聞社※
太田秀通
生活の世界歴史　3　ポリスの市民生活　河出書房※
芸能史研究会編
日本庶民文化史料集成　第11巻　三一書房※
日本史探訪
別巻　古代編1　角川書店※
新訂増補　国史大系　公卿補任　第1～5編　索引　吉川弘文館
飯塚浩二著作集4
図説　日本の歴史8　戦国の世　集英社　※
ドキュメント昭和史
2　満州事変と二・二六　平凡社　※
4　太平洋戦争　同　※
5　敗戦前後　同　※
色川大吉他
歴史の視点　下巻　日本放送出版協会※
網谷彰　生活の世界歴史9　新大陸に生きる　河出書房※
小川信　論集　日本歴史5　室町政権　有精堂　※
和刻本　資治通鑑1～4巻　汲古書院
鈴木富之郎
計量地理学序論　地人書房
西山松之助
江戸町人の研究　吉川弘文館
改訂増補　西洋史辞典　東京創元社
同　東洋史辞典　同
同　日本史辞典　同
日本の歴史6　江戸幕府　小学館　※
17　鎖国　同　※
18　大名　同　※
草野日出雄
写真で綴るいわきの歴史　はまとん※
和刻本正史　隋書1～2　古典研究会
木内信蔵編
世界地理8　ヨーロッパ3　朝倉書店
相良竜介編
ドキュメント昭和史6　占領時代　平凡社　※
城山隆弘
古代中国を発掘する　新潮社　※
川崎敏　木曾　歴史　文学　地誌　浅間　木耳社
富士箱根　同
トラベルブックス
1　パリの休日　世界文化社※
2　ロンドンの休日　同　※
3　ローマの休日　同　※
4　北欧の旅　同　※
5　ドイツの旅　同　※
6　スイスの旅　同　※
7　スペインの旅　同　※
8　南欧の旅　同　※
9　ソ連　東欧の旅　同　※
10　エジプトの旅　同　※
11　アフリカの冒険　同　※
12　ニューヨークの休日　同　※
13　アメリカ東部の旅　同　※
14　アメリカ西部の旅　同　※
15　メキシコ　カリブ海の旅　同　※
16　ラテン　アメリカの旅　同　※
17　アラビアの旅　同　※
18　インドの旅　同　※
19　香港　台北　ソウルの休日　同　※
20　東南アジアの旅　同　※
21　ハワイ　タヒチの休日　同　※
22　南太平洋の旅　同　※

社会科学

世界教育史大系
17　アメリカ教育史1　講談社　※
23　初等教育史1
地域経済総覧　昭和45年度版　東洋経済新報社
コーゼンタール
中世イスラムの政治思想　みすず書房
森岡清美
家族社会学　有斐閣　※
近藤文二他
社会保障入門　同　※
小倉襄二他
社会福祉の基礎知識　同　※
H.L.ゴージェ
地域交通論　大明堂
ＮＨＫ市民大学叢書
2　現代政治学　日本放送出版協会※
3　民法の話　同　※
5　法とは何か　同　※
6　現代の教育　同　※
7　憲法の話　同　※
10　産業社会の展開　同　※
12　実証分析のために現代経済学　同　※
13　流動する経済体制　同　※
14　現代法　同　※
15　都市と市民　同　※
16　都市の経営　同　※
17　都市の制御　同　※
18　都市の回復　同　※
19　教育工学　同　※
24　経済と計画　同　※
26　変動期の日本社会　同　※
29　現代の資本主義　同　※
松島治郎他
社会学セミナー3　家族　福祉　教育　有斐閣　※

自然科学

実用科学英語　ハンドブックシリーズ
2　改訂新版　国際会議
5　和英対照科学技術表現便覧
6　専門編　機械工学和英表現辞典
実用科学ドイツ語
数　数式　記号及び図形の読み方
科学技術論文報告書に必要なドイツ語の決り文句集　日本科学技術英語研究会

数学リーブル
9　経済数学入門　現代数学社※
10　ベクトルと行列　同　※
11　微分と積分　同　※
本多修郎
技術の人間学　朝倉書店
川畑幸雄編
水文気象学　地人書館
NHK市民大学叢書
20　現代科学の方法　日本放送出版協会※
22　現代物理学　同　※
23　宇宙像と生命像　同　※
建設省河川局編
第21回　昭和48年　雨量年表　日本河川協会
D．Jシューリング
模型実験の理論と応用　技報堂
B．ゴ　デルブコリツ
水の世界　講談社※
永島三一郎
物質とはなにか　同　※
ジョンティラー
ブラック・ホール　同　※
フレデリック・Hブー
宝石に強くなる本　同　※
ジョンPロゼー
科学哲学の歴史　紀伊国屋書店
W・ハイゼンベルク
部分と全体　みすず書房
J．モノー
偶然と必然　同
若桑光雄
大学課程　方学演習　培風館
M．E．ローズ
角運動量の基礎理論　みすず書房※
戸田盛和
おもちゃセミナー　日本評論社※
太田時男他
捷要力学演習　槇書店　※
R．B．レートン
現代物理学概論　岩波書店※
日本分析化学会北海道支部
新版　水の分析（5冊）　化学同人※
田中元治
基礎分析化学講座23　溶媒抽出　共立出版※
水野重樹
生物化学実験法　A－般分析法2．核酸の一般的分離　定量法　東京大学出版会※
清水武夫他
電気磁気学　コロナ社※
電気磁気学　改訂版　電気学会※
二村忠元
電磁気学　丸　善　※
遠藤正雄
わかる電気磁気学　日新出版※
わかる電気磁気学演習　同　※
ブルーバックス
B263　十番目の惑星　講談社　※
B264　風景を読む　同　※
Olver　Asymptotics and special functions
Academic
R. Bachi Graphical rational patterns　Jurusalem
Zabreyko　Integral equations a reference text
Nordhoff
Krishnaiah
Multivariate analysis3　Acabemic
Bard　Nonlinear parameter estimation
Academic
Howard Markov models　Wiley
Johnson他
Distributions in statistics comtinuos
multivariate distributions　Wiley
Babic　Mathematics questions in the theory
of wave diffraction 1　A. M. S.
Shafarevich
Basic algebraic geometry　Springer
S. Kobayashi
Foundations of differential geometry 1
D. G. Kabe他　Wiley
Multivaliate statistical inference
North-Holland
Churchill他
Wave motion and vibration theory
McGraw-Hill
R. Finn　Applications of nonlinear partial
differential equations in mathematical
physics　A. M. S.
J. B. Keller他
Stochastic differential equations
A. M. S.
Vanstone
Proceding of the 13 th Biennial Seminar
of the Canadian Mathematial Congress
1　C. W. S.
Hammer他
Mathematical programing in theory
and practice　North-Holland
Collins他
Machine intelligence 1　Edinburth
Luxemburg他
Contributions to non-standard
analysis　North-Holland
Whitham
Linear and nonlinear waves　Wiley
Poincare
Science and hypothesis　Dover
Steenrod
The topology of fibre bundles　Prinston
Bellman他
Hydrodynamic instability　A. M. S.

工学・技術

矢野雄幸他
水質測定誤差とデータ処理
公害研究対策センター
サットン
直接エネルギー変換　好学社
近藤連一
多孔材料　技報堂
国鉄建造物設計標準解説　土木学会
浅間清雄他
くいおよびケーソン基礎の設計計算例
青木乗雄他
直接基礎および橋台橋脚の設計計算例
E．Mサビンキー　山海堂
金属とはなにか　講談社　※
川崎迪一他
道路土工　1，2　山海堂
稲田倍穂
軟弱地盤の調査から設計施工まで
福島出版会
駒井武夫
初級技術者のための工業力学演習
培風館
横山斯他
新編土木工学講座5　土木地学　コロナ社
飯吉精一
土木施工学　技報堂
桜井敏郎他
し尿処理施設の機能と管理　産業用水調査会
中田二男
化学技術者のための測定技術入門
化学工業社
長谷川清十郎
下水試験方法　1974年から1976年版
下水道実務研究会問題集（3冊）
鈴木栄一　日本下水道協会
環境統計学　情報処理の考え方
環境情報科学センター
藤枝純教他
大型情報処理大系　実践的システム開発論
共立出版※
星野芳郎
機械文明の崩壊のなかで　人文書院
渡辺征夫
環境汚染分析法8　微量ガス　炭化水素
（2冊）　大日本図書
上田実他
電気材料　朝倉書店※
山中俊一他
近代電気材料工学　電気書院※
第10回　日本道路会議特定課題論文集
会議記録
第11回　日本道路会議　一般論文集　特定課
題論文集　会議記録　日本道路協会
全国公共用水域　水質年鑑　1975年版
美善情報センター
工業計測ハンドブック　トランジスタ式計器編
空気式計器編　東京電気大学出版局※
千本資他
自動制御基礎講座　工業計測　オーム社※
基礎電気工学講座
7　伝送回路　共立出版※
14　磁気回路　同
城戸健一
過度現象論　朝倉書店※
天野弘他
改訂　電気回路理論　コロナ社※
尾崎弘他
大学課程　電気回路2　オーム社※
石塚貞雄
工学基礎としての電気回路理論　コロナ社※
鬼頭幸生他
電気回路論　広川書店※
早田保実
電気回路計算法　直流編　改訂版
交流編　森北出版※
Ernst Aguirremin
回路網基礎学　回路網合成　上下
近代科学社※
Wirherm Kroin
回路網の基礎理論　コロナ社※
斎藤正男
回路網理論演習　学献社　※
矢田平祐
実務家のためのブレーキ　鉄道日本社※
吉田竜夫他
環境の科学　日本放送出版協会※
高橋利衛
基礎工学セミナー　現代数学社
土木学会土木計画学研究委員会
土木計画シンポジウム（7.8.）　土木学会
土木計画調査会テキスト（5.7.）　同
社団法人日本建設機械化協会
骨材の採取と生産　技報堂
中田秀夫
くい基礎の設計　オーム社
斐東利宏他
橋梁の設計　同
近藤次郎
大気汚染　コロナ社
建設省技術研究会
第27回建設省技術研究報告　昭和48年度
殿上武雄編　土木研究会
土木工学マニュアル（5冊）　近代図書※
加藤正甚編
歯車伝動機構設計のポイント　日本規格協会
交通工学
3　改訂　交通流理論　技術書院
4　推計学の交通工学への応用　同
5　電子計算機の交通工学への応用　同
9　改訂　増補　交通量の予測　同
10　改訂　増補　交通容量　同
12　交通量の変動　同
交通工学研究会編
道路の交通容量　1965　同
原田千三編
埋設管設計法　森北出版
ラッセルしゲーブ他
廃水の高度浄化法　公害対策技術同友会
建設省河川局編
第26回　昭和48年　流量年表　日本河川協会
殿上武雄
土木工学マニュアル（7冊）　近代図書
港湾　空港ハンドブック　建設産業調査会
Atkinson 他
The European Computing Congress
Online
American Society of Civil Engineers
Research conferenceon shear strength
of cohesive soils　University Colorado
H. Tada 他
The stress analysis of cracks
handboock　Del Reserch
A history of the theory of elasticity
and of the strength of Materials 1,2
Dover

Corten Fracture mechanics part 2
A. S. T. M.
Aho Currents in the theory of Computing
Prentice-Hall
Rodinet Lecture notes in computer science 19
Springer
H. H. Kagiwada
System identification Academic
W. A. Hall 他
Water resources systems engineering
Mcgraw-Hill

産　業

藤田仁太郎
英語貿易産業辞典　研究社
高橋一三
土壌の汚染と浄化作用　産業用水調査会
木地節郎
小売商業の集積と立地　大明堂

芸　術

竹山道雄
古都遍歴　奈良　新潮社
内藤湖南
支那絵画史　筑摩書房
マルソー他
パントマイム芸術　未来社 ※
K. スタニスラフスキー
俳優の仕事　1～4　上　下　理論社 ※
ピーターブルック
なにもない空間　晶文社 ※
木下順二
ドラマの世界　未来社 ※
河野慎夫
舞台　装置の仕事　同 ※
朝田秀龍
舞台　効果の仕事　同 ※
グロトフスキー
実験　演劇論　テアトロ ※
アルトー
演劇とその形而上学　白水社 ※
田中千禾夫
物言う術　同 ※
学校サークル　青年演劇　脚本集　1.3. ※
学校サークル演劇　一幕物脚本集1.2.3.5.6.　青雲書房 ※
新芸術研究会編
アマチュア演劇づくりハンドブック　同 ※
2　大系世界美術　古代アジア美術
学研社

語　学

小西友七
英語前置詞活用辞典　大修館書店
馬鳴春樹
新釈，漢文大系84　中国名詞選　明治書院 ※
金石五郎
コンサイス独和辞典　三省堂
最新コンサイス和英辞典　同
最新コンサイス英和辞典　同
岩隈直　新約ギリシヤ語辞典　山本書店
英語日常語辞典　北星堂書店
日本国語大辞典15　とふーのかん（2冊）
小学館
内田泉之助
新釈漢文大系61　五省新詠　明治書院 ※
貝塚茂樹他
角川　漢和中辞典　角川書店
新村出　広辞苑　第二版　岩波書店
小西友七
英語前置詞活用辞典　大修館
新村出　広辞苑　岩波書店

藤田五郎
藤田ドイツ語入門　第三書房 ※
関口　初等ドイツ語講座　上　下
関口　新ドイツ語大講座　上　中　下
三修社 ※
荻原泰然他
独和レキシコン　大学書林 ※
岩崎英二郎
ドイツ語不変化詞辞典　白水社 ※
日本大辞典刊行会
日本国語大辞典16　小学館 ※
丸谷才一
日本語のために　新潮社 ※
岩淵悦太郎
語源散策　毎日新聞社 ※
鈴木孝夫
中公叢書　ことばと社会　中央公論社 ※
Nicholas KUPP
ヒヤリングのコツ　研究社
日本国語大辞典16　小学館
滝田文彦他編
NHK市民大学講座31　言語　人間　文化
Susie E. Cowan 他　日本放送出版協会 ※
米会話　エクスプレッションの演習　上　下
語　研

文　学

古事記総索引　本文編　索引編　平凡社
万葉集総索引　単語編　漢字編　同
日本文学研究資料叢書
古事記　日本書紀　有精堂
日本古典鑑賞講座
1　日本文学入門　角川書店 ※
2　古事記　風土記　歌謡記紀　同 ※
5　竹取物語　伊勢物語　同 ※
6　王朝日記　同 ※
8　今昔物語　宇治拾遺物語　同 ※
12　太平記　曽我物語　義経記　同 ※
13　徒然草　方丈記　同 ※
15　謡曲　狂言　花伝書　同 ※
16　御伽草子　仮名草子　同 ※
18　芭蕉　同 ※
19　俳句　俳論　同 ※
20　近松　同 ※
23　川柳　狂歌　同 ※
25　馬琴　同 ※
鏡花全集　18～20　岩波書店 ※
17　筑摩世界文学大系　シエクスピア 2 ※
18　古典劇場 ※
71　イエイツ　エリオット　オーデン
筑摩書房 ※
高田美一
T.E ヒューム.思索ノート研究　北沢図書出版
吉野せい作品集　湧をたらした神
弥生書房 ※
城山三郎
落日燃ゆ　新潮社 ※
ソルジェニーツイン
収容所群島（2冊）　同 ※
新田次郎
アラスカ物語　同 ※
五木寛之
青春の門　筑豊篇　上　下　自立篇　上　下
放浪篇　上　下　講談社 ※
池田弥三郎
講座　古代学　中央公論社
山岡荘八
燃える軌道 1　学習研究社 ※
阿部公之

暗い波濤　上　下　新潮社 ※
安岡章太郎全集（7冊）　講談社 ※
竹内照夫他
中国古典文学への招待　平凡社 ※
西尾幹二
懐疑の精神　中央公論社 ※
石川淳全集　2.　14.　筑摩書房 ※
明治文学全集53　正岡子規集　同 ※
バルザック全集14, 20, 23, 25　東京創元社 ※
アレンギイト
現代詩の領域　南雲堂
吉川幸次郎全集　第18巻　筑摩書房
日本古典文学大系28　新古今和歌集
岩波書店 ※
荷風全集　27～29　同 ※
プーシキン全集　5～6　河出書房 ※
平野謙　文学　昭和10年前後　文芸春秋 ※
平林たい子
宮本百合子　同 ※
小松登美
増訂　寝覚物語全釈　学燈社
秋山虔編他
日本古典文学史の基礎知識　有斐閣
松田修　闇のユートピア　新潮社
秋本不死男編
近代俳句大観　明治書院 ※
鑑賞日本古典文学
4　歌謡 1　角川書店 ※
6　竹取物語　宇津保物語　同 ※
9　源氏物語　同 ※
18　方丈記　徒然草　同 ※
28　芭蕉
筑摩世界文学大系18　古典劇集　筑摩書房 ※
鈴木明　リリーマルレーンを聴いたことがありますか
文芸春秋 ※
アーノルド・ウェスカー
29　演劇－なぜ　晶文社 ※
松原武一
武田泰淳論　審美社 ※
日本詩人選　23　藤原俊成　藤原良経
筑摩書房
現代世界演劇　1～17　白水社 ※
1～2　近代反自然主義　同 ※
詩的演劇　同 ※
宗教的演劇　同 ※
実存的演劇　同 ※
1～3　不条理劇　同 ※
政治劇　同 ※
政治寓意劇　同 ※
記録的演劇　同 ※
1～3　リアリズム劇　同 ※
風俗劇　同 ※
現代のクラシシズム　同 ※
出合いのトランポリ　同 ※
別巻　現代世界演劇の展望　同 ※
Stillman
Samuel Butler　Kennika
Bekker　An historical and critical Review of Samuel Butler's isterary works
Russell
S. Butler
Essays on life　Kennikat
Harkness
The career of Samuel Butler
Burt Franklin
H. F. Jones
Samuel Butler　Jonathan Cape
De Lange
Samuel Butler　Haskell House